

分類法の将来

2002年1月8日

慶應義塾大学文学部図書館・情報学専攻3年

中山恵美

松田千春

I. 研究の目的

現在一般に使われている「分類法」にはたして将来はあるのか。それらはニーズを反映できているのか。現在使用されている分類法を分析し、その問題点を考えるのが本研究の目的である。まず分類することそのものの定義を考え、各分類法の目的と特徴を知る。その上で現状をカテゴリの種類、分類の構造、分類者という3つの視点から分析する。最終的には、分類の対象となるものはどう変化するのかを予測し、現状分析と照らし合わせその問題点を指摘してまとめとしたい。

対象とする分類法は、図書分類のデューイ十進分類法(以下 DDC)、国際十進分類法(以下 UDC)、日本十進分類法(以下 NDC)、アメリカ議会図書館分類表(以下 LCC)、国立国会図書館分類表(以下 NDLC)、コロソ分類法(以下 CC)、ブリス書誌分類表(以下 BC)と Web の分類法として Yahoo! Japan のカテゴリの 8 点とする。

II. 分類の目的

A. 分類の定義

『広辞苑』¹⁾によると classification とは「区分を徹底的に行い、事物またはその認識を整頓し、体系づけること」である。また『図書館情報学ハンドブック』²⁾ではこう定義されている。

分類とは、日常的には「ある事物またはそれに関する知識を、区分する規則に基づいて細かに区分し、整合的な組織体に組み立てること」をいう。事物またはそれに関する共通の性質を持つものを集めてグループを作るといふことと、他方、異質のものを分離するといふ両面を有する。

一般的な定義を求めて『広辞苑』をひいたが、図書館情報学の文献でも『広辞苑』と同じように定義されている。この研究で用いる「分類」も上のような意味とする。

B. 図書分類の目的

図書自体、もしくは図書の書誌的記録を分類する目的は「利用者が、さまざまな図書の中から求める情報を収集した図書を容易に見いだせるための工夫」³⁾にある。その「効率的な利用」⁴⁾のための分類は「資料自体またはその書誌的記録の配列と主題検索」⁴⁾という機能を持ち、そのためには「知識の分類に対応した何らかの順序に配列されていなければならない」⁴⁾のである。分類による配架はブラウジングを前提にしていると考えられる。

C. Web ページの分類の目的

Web ページの分類は Yahoo! Japan に代表されるディレクトリである。このディレクトリ検索は「漠然とした興味や物事の周辺情報なども含めて、ホームページを探す時には細やかな分類に登録されたカテゴリによる検索が便利である」⁵⁾という考えのもと作られている。つまり、Web ページは配架(それによるブラウジングも含めて)の必要がないため、Web ページの分類は検索目的を主としているのであ

る。

D. 各分類法の目的

1. デューイ十進分類法 (Dewey Decimal Classification: DDC)

DDC はデューイ (Dewey, Melvil) が 1876 年に創案した分類法であり、1996 年に発表された第 21 版が最新である⁶⁾。

デューイは「当時支配的だった固定配架方式⁷⁾に疑問を感じ」、「相対配架方式⁸⁾を基に」、「多くの図書館が抱えている問題を解決するより良い方式を考案すること」を考えた⁶⁾。DDC の目的は、蔵書量が増大し、全体を合理的に管理し利用することが難しくなりつつあった「図書を書架上に分類体系に則った配列として組織する」ための分類法、すなわち「書架分類法」の創案であった⁷⁾。DDC は相関索引を取り入れたことで「区分観点が異なると関連主題が分散する」⁷⁾という弱点を克服し、「1 つの語のもとに集中」²⁾させることを可能にした。定義や範囲などに関する詳細な注記は分類者の違いによる分類結果の違いを防ぎ、複合主題の表現も可能にしている¹⁰⁾。

2. 国際十進分類法 (Universal Decimal Classification: UDC)

UDC は 1895 年、ベルギーのラフォンテーヌ (La Fontaine, Henri) とオトレ (Otlet, Paul) の提唱で、世界的な学術文献目録を編纂するために DDC の拡充を試みたことに始まり、初めから図書よりも内容の細かい文献のカード目録作成を目的としていた⁴⁾。初版は 1905 年のフランス語版、以来詳細度により簡略版、中間版、専門版が発行されており、日本語版の最新は 1994 年の中間版第 3 版である²⁾。

3. 日本十進分類法 (Nippon Decimal Classification: NDC)

NDC は DDC の「十進方式を導入し、これを日本の図書館で適合するように再構成した、図書館の蔵書を分類するための表とその関係資料」¹¹⁾であり、もり・きよし (森清) による 1928 年の「和洋図書共用十進分類法案」に始まる¹¹⁾。現在は 1995 年に発表された新訂 9 版が最新である²⁾。

NDC の記号法は DDC に倣っているが、DDC の英語圏、キリスト教圏中心¹²⁾だった主題体系を日本の図書館に適合するように再構成されている。なお、9 版では「一館単位の書架分類を基本とする NDC8 版の方針では適当でなく、全国書誌を念頭に置き、詳細に分類する方針をとった」¹¹⁾と書誌分類を標榜している。

4. アメリカ議会図書館分類表 (Library of Congress Classification: LCC)

LCC は 1897 年⁶⁾の移転の際に増大する「蔵書に即した実用的な新しい分類表」²⁾の作成を目指したもので、「LCMARC の普及によって議会図書館以外でも利用されている」が「あくまでもアメリカ議会図書館のための分類法」である⁶⁾。「1901 年刊のクラス Z (Bibliography and Library Science) から始まり、1993 年刊のクラス KL-KWX (Law of Asia and Eurasia, Africa, Pacific Area and Antarctica) をもってようやく完成した」²⁾。

LCC は 21 のクラスごとに別々の専門家グループにより独立して作成、公刊、改訂がなされ、補助表も分野ごとにある²⁾。記号はアルファベット 1 または 2 文字に最大 4 桁の整数で表される混合記号法である⁴⁾。将来の展開に備えて空番が設けられているが、前後の主題と無関係に充てられることもある⁴⁾。

5. 国立国会図書館分類表 (National Diet Library Classification: NDLC)

NDLC は国立国会図書館で使用できる和洋共通の分類表作成を目的として 1967 年に完成され、1987 年に改訂版が刊行されている³⁾。

記号法は LC と似た混合記号法。納本資料の網羅、国会サービス、外国資料の重点的蓄積という NDL の特徴あるコレクションに対応できる構成であり、また図書館員の調査利用に必要な分類配架を想定したのものにもなっている³⁾。

6. コロン分類法 (Colon Classification: CC)

コロン分類法は「インドのランガナータンが創案した分類法で、初版は 1933 年に出版された」²⁾。従来の列挙型分類では補えない「知識や学問の分野に従来の系統からはみ出す新主題や学際的広領域の分野が発生したり、また様々な複合主題の誕生、主題相互の関係の多様化」⁷⁾というような問題に対応することを目的としている。

CC は「主題区分と 5 種の基本カテゴリー、パーソナリティ P、物質 M、エネルギー E、空間 S、時間 T との組み合わせによる。(中略)各主題区分のもとの要素は数字であり、記号を組み合わせる際はコロンその他の記号を用いて関係の性格を示す」³⁾。

7. ブリス書誌分類法 (Bibliographic Classification: BC)

「ブリス書誌分類法は、ブリスが生涯を費やして完成した分類表であり、1910 年に最初の構想が発表された」²⁾。BC は「複合主題を完全に表現できるような独自の分類表の開発を目指」²⁾すことを目的として作られた。その後「1969 年にブリス分類法教会により BC の改訂作業が始ま」²⁾り、「1977 年に第 1 分冊が刊行され、以後分冊形式で順次刊行中」²⁾である 2 版ができた。

BC は「主題の配置に、一般から特殊への秩序を常識的明快さで納得がいく論理で構成し、(中略)ローマ字のみを重ねて少ない記号で、より深い分類を図り、数字を形式区分的なもの、小文字のアルファベットを場所の区分に割り当てた。記号が短くて豊富な内容を表現できる優れた特質を持ち、二者択一の要素を多く備え、分類上の異論に対応できる柔軟性がある」³⁾。

2 版では「抜本的改訂が加えられ」²⁾、「一貫したファセット構造を取り入れ、(中略)事象一般を収めるクラスが設けられたのが大きな特色といえる」²⁾。

8. Yahoo! Japan のディレクトリ

- C で述べたように、カテゴリによる検索を可能にするためである。Yahoo! Japan は検索精度を上げるため、「複数のカテゴリに登録する」⁵⁾インディビジュアル・リンクや、「カテゴリごと、別のカテゴリにリンクしてしまう」⁵⁾カテゴリ・リンクを実施している。

III. 現状分析

ここでは現在の分類法が分類の目的と照らしてその目的を達しているか、現在のニーズを反映するものとなっているかをカテゴリの種類、排他的であるか重複可能であるかという構造面、誰がどのように分類するのかという分類者の面という 3 つの観点から検証する。

A. カテゴリの種類

1. NDC

NDCの主題分類が現在の「ニーズ」を反映しているのかを検証するために、2000年の新刊書籍部門別点数(第1表、第1図:別紙)¹³⁾を分析する。NDCの初版が刊行されてから既に70年以上経過しており、改訂を重ねているとはいえ、記号の保全を謳うNDCの主題構成が現代の出版状況に適したものであるとは考え難い。そこで、全体に占める割合が極端に大きい類項目は細分化し、逆にもはやほとんど該当する出版がないような項目は淘汰して階層を再考すべきだろうと予測する。

第1図から分かるように、全体のうち最も多くの割合を占めるのは4類の「自然科学」、その後に9類「文学」、7類「芸術」と続く。この3類のだけで全体の5割を越えているが、もう少し細かく各項目の占有率を見ていくことにする。

占有率を考えるに当たり、今回は各項目の出版点数から分類内と全体における偏差値¹⁴⁾を算出した。まず全体の中で特に占有率の高いものを抽出するために全体中での偏差値が70以上になった項目を抽出したのが第2表(別紙)である。抽出された4項目のうち、910「日本文学」はそのほとんどを占めるのが文芸書と推測できることから、この点数の多さも当然のものとしてここでは特に検証することはしない。残りの3項目では2位になる330「経済」は全体での占有率は高いものの、3類の中ではそれほど突出して多いわけではないことが分かる。しかし残る2項目を見ると、490「医学・薬学」、720「絵画・書道」はそれぞれ類内でも偏差値70以上となり、高い占有率を占めており、ここにNDCの分類の矛盾を見つけられそうである。

次に類内で偏差値が70以上になった項目を抽出したのが第3表(別紙)だ。対全体で見ると多くの9項目が挙がっている。全9項目の中で9項に当たるものが3つあるが、その490「医学・薬学」、290「地理・地誌・気候」、590「家政学・生活科学」のいずれもが、十進法であるがために本来与えられるべき類を割り当てられずに類似主題の下位の項を充てられている。490「医学・薬学」に至ってはそれだけで4類「自然科学」の73%を占めている。本来類であるべきものを項にとどめたために類内での占有率が異様に高い項目が出来上がっている現状がここにある。

今度は逆に全体中の偏差値が45未満の極端に少ない項目を見ることにする(第4表:別紙)。その多くは特定地方を扱った歴史と言語文学であり淘汰を考えるには慎重にならねばいけないが、その中でひととき目を引くのは点数1の630「蚕糸業」である。NDCが誕生し70年が経つうちに産業構造も大きく変わっている。このような古くなった項目には1つの項を与えず、下位に位置付けるほうがよいのではなかろうか。さらに言えば、6類の「産業」そのものの占有率も高くない。「生産・流通・経済の関係が分断されている」³⁾という批判もあり、十進法を維持するのならばそろそろ大胆に見直す必要があるように思う。

最後に000「総記」と720「絵画・書道」に集中している理由を考えてみたい。0類「総記」は全体の4%強を占めるのみでありそれほど出版点数は多くないが、その中でも000「総記」だけが1000点を越え、類内で65%を占めている。000内をもう少し見てみると、1679点のうち19点が002「知識・学問・学術」である以外は全て007「情報科学」である。そもそも00項で目が割り振られているのが002と007しかないため当然と言えば当然だが、一つの目に1660点が分類され、その中でさらに類内ではここだけが小数点以下3桁まで展開されている事実はやはり尋常ではない。いわゆるマニュアル本までここに入るとなると、今後「情報科学」に関する出版はやはり増えるだろう。540「電気工学・電

子工学」との関連も考えながら再考する必要がある。

一方 720「絵画・書道」の 2984 点も類内の 3 分の 1 を占める大きな項目となっている。これも細かく見てみると 2984 点中 2518 点が 726「漫画・挿絵・童話」に分類されていることが分かった。726.1「漫画・劇画・風刺画」の注記には特定主題を扱うものは各主題の下に収めると書かれているが、ほとんどの漫画はこの 726.1 に分類されることになる¹⁵⁾。これは文字の出版物を前提に主題別に分類する分類法において、主題を無視して形態のみで分類していることにより起きている矛盾ではないだろうか。同じく形態別である*03「参考図書」などは主題に分類された上での項目である。漫画の点数はもはや無視できないまでになっている¹⁶⁾。技法や漫画論は別だが、特定主題を扱わず形態のみで 726.1 に分類されている一般的な「漫画」は別個に扱うことが必要なのではないだろうか。

以上 2000 年の出版点数を用いて NDC が現在のニーズに適合しているかを検証してきた。結論から先に言えば、現代に併せて再改良すべき点が多々あり完全にニーズに合っているとは言えない。その理由は大きく 2 点である。第一に、6 類「産業」や 0 類「総記」に見られる時の経過による現実との乖離である。またこの数字では分からないが、学術書を念頭に置き「<知識の宇宙>から主要な学術・研究領域を列挙し、第一次区分とする」¹⁴⁾19 世紀の EC に基づく主題構成にも疑問を抱く余地はあるだろう。それこそ 70 年経つ間に出版物の内容は軟化してきているに違いない。Web 分類のようなエンターテイメント性を持つ分類法を考える必要はあるはずだ。そして第二に十進分類法であるための無理である。490「医学・薬学」など本来 1 つの類を構成すべき主題が下位にあるために、階層構造も見えにくく、記号の桁が増え煩雑になっている。また逆に 6 類「産業」や 00 項のように 10 も項目を必要としない部分も存在する。十進分類を使いつづけるのなら過密項目と過疎項目を見直して編成し直す必要があるだろう。

2. Yahoo! Japan のカテゴリ

一方、Yahoo! Japan のカテゴリはエンターテイメント中心である。第 5 表（別紙）は Yahoo! Japan のトップカテゴリとその下の第 2 カテゴリ、括弧内の数値をまとめたものである。

一番数値の多い「地域情報」の第 2 カテゴリが全体で一番少ない 5 つである。1999 年の論文¹⁷⁾でも、ページ数こそ違えど、一番ページ数の多い「地域情報」の第 2 カテゴリ数が一番少ない。この下の層で都道府県に分かれるのだが、それにしても 1 つのカテゴリに集中しすぎている。これは分類法として無理をしていると言えないだろうか。

B. 構造から見た現状

ここでは各分類法が重複して分類されることが可能か不可能かを考え、さらに排他的である分類法・重複可能である分類法のメリットとデメリットを考える。

ここでは「1 つの資料に 2 つ以上の記号を付与することができる」分類法を「重複可」、「1 つだけしか付けられない」分類法を「排他的」とする。すると、D で挙げた代表的な分類法のうち、図書分類はすべて排他的である。列挙型であれ分析合成型であれ、図書館で使用されるように作られた分類法は配架を前提に考えられているのである。一方、配架の必要がない Web ページを扱う Yahoo! Japan のディレクトリは重複可になる。

1. NDC...原則排他的

NDC はその規則で「複数主題」の時には 1 箇所を特定させている。

1 つの著作で、複数の主題を取扱っている場合、そのうち 1 主題が特に中心として取り扱われている場合は、中心となる主題のもとに分類する。

しかし、2 または 3 個の主題を取扱っていて、どの主題も特に中心となる主題がない場合は、最初の主題に分類する。

もし 4 以上の主題を扱い、特に主となる主題がない場合はそれらを含む上位の分類項目の下に分類する。¹⁾

2. DDC...原則排他的

DDC は規則、注記、優先表により 1 箇所を特定する。その規則は NDC で挙げたものを少し詳しくしたようなものだが、学際的著作や包括的著作を導く「ここに分類せよ注記」、手元の番号の下位区分に分類しないならどこか関連する番号に分類せよという「他の場所に分類せよ注記」、優先表によって分類法構造の欠点を補填しようとしている。

3. LCC...原則排他的

LCC も他の分類法同様、記号の合成によって複合主題¹⁸⁾を表すことはできるが、配架するために 1 箇所に特定される。LCC には分類規定は存在せず、分類の際には索引および本文中の注記をよく検討せねばならない⁶⁾。複合された主題はその中に含まれる特定の主題概念を選択してその項目に割り振るのではなく、主題を複数の主題概念に分析せずに、複合した主題そのものを列挙の形で示すために設けられた分類項目「ジェネラル・スペシャル」「スペシャル・トピック」を用いて示される。

4. NDLC...原則排他的

NDLC も大綱は LCC と類似するため 2 つ以上の項目に重複させて分類することはできない。

5. UDC...原則排他的

UDC には数字を並べる順番によって主従が決まり、先と後をひっくり返し、重複、ということとはできない。しかし検索の時は重複可のものと同じ効果が得られる。

6. CC...原則排他的

CC は PMEST の組み合わせであり、同じ項目についての重複はありえない。

7. BC...原則排他的

BC には補助表があり、カテゴリを並べる時の順番が決まっているので、1 つの主題に重複記号はありえない。

8. Yahoo! Japan...重複可

Yahoo! には 1 つのサイトを複数のカテゴリに登録する「インディビジュアル・リンク」がある。

9. 排他的分類と重複可能な分類

排他的分類の第1の長所は、ノイズの削減が可能である点である。排他的分類では1つの記号を付与するために資料が扱うテーマのうち一番主とされているものを取り上げるので、分類記号を与えられたが取扱いが軽いために役立たない「はずれ」がないのである。第2の長所は分類記号に忠実に配架できる点である。記号が一つしかなければ配架の際に迷ったり間違えたりする可能性は限りなく低くなる。

しかしこの2つは短所にもなりうる。1つめは、少しだけ取り上げたテーマについての検索漏れがあるということ、2つめは混合主題¹⁹⁾が表現できないということもまた表す。主な主題以外は分類記号に採用されないために、2つ目以降の主題については漏れとなってしまふ。複数の主題や混合主題がある場合、どれを主な主題として選択するか、または上位の分類記号を付与するかなど、分類者の判断に委ねられるところが多く、必ずしも一定にならないことも考えられる。上位概念の記号を付した場合は長所であるノイズの少なさも疑問視せざるを得ない。

重複可能な分類法を使うメリットは、まず2つ以上の記号を付与することによって混合主題が表現できる点である。それにより検索漏れも防ぐことができる点も挙げられる。逆にデメリットは、扱いが軽い場合でもその主題に相当する記号を付与するためにノイズが多いことだ。また記号が複数あるので配架もしにくい。重複可能な分類法の場合も、どの程度扱っている主題を取り上げるかは人の判断によるので、検索漏れが防げるというメリットを疑問視せざるを得なくなる。

C. 分類者から見た現状

1. 人による分類

現在ほとんどが人間の手による分類である。この分類方法をとるメリットは、本を読んで内容から判断でき、複雑な資料に関しても正確な記号を付与することができることである。

デメリットは、まず時間と手間がかかることだ。人間が内容を判断し、他の人がチェックをするという時間がかかる。また、記号を付与するための専門家の育成をする必要もある。上に述べたように、分類は分類する人による判断に委ねられる場合がある。専門家がやらねばならないのである。また主題に関する知識もなければ誤った分類がなされることにもなる。そして人による判断のため、一貫性もない。

2. 機械による分類

機械による分類とは自動分類のことを指す。自動分類とは、「判断基準に基づいて、異なる性質をもつものどうしを分け、同じ性質をもつものどうしをまとめる」⁶⁾手順を「コンピュータなどを用いて機械的に行うこと」⁶⁾である。

自動分類のメリットは人による分類の逆で、時間と手間がかからないこと、また機械に条件をインプットして判断させるので、大量の文献を一貫した基準で処理できることである。

デメリットは、その基準が数学的技法を使って単語に重みを与えるといった方法なので、単語からしか判断できなく、間違いがあるかもしれないという点である。複雑な主題や学際的主題に対応することができるのかという点にも不安がある。

IV. メディアの移行

第 4 章で述べたように、図書や Web ページといったメディアの違いにより分類の目的は変わり、どのような分類法が将来使われるかの判断も変わる。本章では分類の前提となるメディアがどのように変化するか考察したい。

第 6 表（別紙）は年度ごとの出版物の販売部数の推移である。紙媒体の本が読まれなくなっているとはよく聞かすが、それが顕著にあらわれている。

では、売上ではなく、利用時間はどうなっているだろうか。

第 7 表（別紙）を見てみると、読書時間が 2～3 分短くなったかわりに、インターネットや E メールが 5～6 分長くなっている。2 年度分だけで変化が見えるということは、年を追うごとに着実にメディアの利用状況が変わると見てよいだろう。

しかし、すべてがデジタルコンテンツに変わるかというと、そうとも言えない。現在専用ソフトを使ったオンライン出版も出来たが、それらは紙媒体の図書と同じ内容であり、紙の代替である。これは日本語がグローバルな言語でないため、遠距離発信を前提としたデジタル出版の必要がないからである。また、出版者による複製不可の専用ソフトならともかく、分類が主に活躍する図書館でのデジタル化というと、著作権の問題で実現は難しいだろう。

これからは電子媒体が増え、従来の紙媒体のような整備された分類法が必要となる。しかし紙媒体が消えるということはないので、電子媒体のみに通用する分類法を押しとおすのではなく、それぞれのメディアに適合した分類法を残す必要があるだろう。

V. まとめ：メディアに適合した分類

以上のことを総合して、どのような分類法が望ましいかメディア別に考えた。ここでは図書、雑誌、雑誌論文、パッケージ的に利用するデジタル資料、ネットワーク的に利用するデジタル資料、Web ページの 6 通りを想定した。デジタル資料 2 種は両方とも CD-ROM などパッケージ系電子メディアを想定しているが、2 通りに分けたのは、同じ CD でも配架や館外貸出しをしたり館内でサーバーからの提供をしたりと利用方法が異なれば、分類に求められる要件も異なると考えたからである。

A. 紙媒体のメディア

1. 図書

図書は配架されるのが望ましいが、OPAC の浸透により書誌上での分類の重複が可能になっている。学際的主題や混合主題のよりよい分類のため、重複可能な分類法がのぞましい。配架のためには従来の方法で 1 箇所を特定すればよい。

主題構成については再考すべきだ。DDC が元にしたハリスの逆ベコン型（1870）も⁴⁾、NDC が元にしたカッターの EC（1891-1893）⁶⁾も 19 世紀の所産である。学術書を想定した〈知識の宇宙〉の体系で娯楽書やマニュアル本を分類するのに相当な無理があるのは - A で見た通りである。- A ではまた十進分類法の限界も指摘した。記号法は、簡素さよりも階層概念の正確さを取り、アルファベットを用いた混合記号法がよいだろう。

分類者はやはり人であるべきだろう。デジタル化されてないので大量のページをスキャンするのは困

難であり、複合主題や混合主題が多いことから、人による判断が求められる。

配架について補足したい。近年自動書庫を採用する図書館が増えている²²⁾。増えつづける蔵書の収納スペースと配架の手間を考えると自動書庫を導入するという選択は理解できるが、果たしてそれは利用者と、また図書館員にとって良い選択なのだろうか。自動書庫には人間は立ち入ることもできない。図書館員は自動書庫内にどのような資料があるのか把握できず、利用者はその部分のブラウジングができない。

ブラウジングは情報検索を行う際の<目標>か<探索経路>が欠如しているか曖昧な場合に生じる行動形態である²⁾。そこでは実際に資料を手に取り目次や本文を見ることで、検索によってレバントであると示された資料が質的に量的に、また既知事項と照らして本当に自分に適した資料なのかの判定が行われる。また漠然とある主題の資料を探したいが検索式が思いつかない、あるいは1冊良い本が見つかったが同じ分野で別な本も探したいというような場合の探索が行われる。ここで重要なのは利用者が実際に書架を歩き、書架を眺め、資料を手にとることが可能であることなのである。ブラウジングの副産物として、<掘り出し物的発見 (serendipity)>、すなわち思いがけない発見の可能性が示唆されている²⁾。「掘り出し物的発見はたんに広い範囲をしらみつぶしに見てゆく場合にだけ起こるのではなく、目録や書架のように掘り出し物的な発見に備えてあらかじめ情報が組織化されているものから得られる場合も」²⁾ある。このようなブラウジングが将来自動書庫により完全に消滅させられることはまず考えられない。

2. 雑誌

雑誌はまず一般雑誌と学術雑誌で分ける必要がある。一般誌はエンターテイメント要素が強く、書店のような分類にしないと、特定カテゴリへ集中してしまう。学術雑誌は主題も図書同様多岐にわたり、また当然ながら学術色が強いいため、図書分類を利用すればよいだろう。しかし雑誌の分類は図書分類の上から2桁ほど、十進分類ならば100区分あれば十分であろう。類から項に相当する主題は限られていても、1冊の雑誌に掲載される論文は多く、その論文の主題がそれぞれ異なれば、雑誌という単位で与えることのできる分類は自ずと広いものにせざるをえない。

配架をすることと詳細さを要求されないことから、雑誌の分類は排他的なものでよいだろう。また、分類者は人の方が望ましい。自動分類では特集が組まれた場合、その巻のみに特徴的な語を「主題を表す語」として使用してしまいかねないからだ。しかも雑誌は一般的に一度初回受け入れの際に分類を付与してしまえばその後分類作業は発生せず、図書ほど手間は要求しない。

3. 雑誌論文

雑誌論文は配架をしないため重複可能な分類法の方が自然である。雑誌論文は分野の細部についてのものが多く、混合主題はほとんどないと言える。その代わり複合主題ばかりで、語の関係など判断しにくいものがある。複数の記号を与える際に注意せねばならないのは語の関係がはっきりと分かる形で記述しなければならない点だ。以上を鑑みて、雑誌論文については現在主に論文の分類に使用されているUDCが適しているように思われる。UDCであれば例えば混合主題は並置記号で53+54(物理学と化学)と、複合主題は関連記号で53:54(物理数学)と区別することができる⁶⁾。

また学術論文はその主題の複雑さのため、機械が助詞や助動詞の微妙な使いまわしを判断できるならともかく、単語の重みで判断するのなら自動分類は困難と思われる。またキーワードの自動抽出まで機

械が行ったとしても、UDCのような複雑な分類記号を振ることは非常に難しい。そこで人の手による分類作業が適していると思われるのだが、ここで提案したいのは学術雑誌の査読者による分類記号の付与である。先に述べたように、高度に専門的な資料については主題知識がないと記号の付与は難しい。しかし査読者ならばその雑誌の分野に関しての知識は持っており、また必ず読まねばならないのであるから、新たに分類者が読む手間をかけずにすむ。以上より、学術論文に関しては査読者によるUDCの利用が最適と考える。

B. 電子メディア

1. パッケージ的に利用する電子メディア

パッケージ系電子メディアとは、CD-ROMやDVDのことである。これらは具体的に場所を取ることから配架されなければならないが、図書と同様、書誌上で分類を重複させ、主な主題に従って一箇所に配架するようにすればよいのではないだろうか。カテゴリの構造としては、データベース、映画、教材VTRなどの用途から、法学、科学などのテーマ・内容へと分かれるものを提案する。用途についてはパッケージやカタログから人が判断し、テーマも同じ方法で決定すればよいだろう。映像の検索は可能であるが、映画のように複雑な資料は映像からテーマを判別するのは難しい²³⁾。これらに関しては量と難易度から考えて人の手による分類が適当と思われる。

2. ネットワーク的利用のデジタル資料

先述の通りネットワーク的利用の電子メディアとは、インターネットのことではなく、図書館内のサーバーが管理し、端末やブースから呼び出して利用する形態の資料のことである。基本的にパッケージ系電子メディアと同じ分類法で対応できるが、これは配架の必要はないため、上に提案した分類法の主要テーマの選択という過程が省略できる。同じく人による分類がよいと思うが、今後の視聴覚資料の増加を考慮すると、映画以外のデータベースや音楽などは判定技術の進歩により自動分類でもよいかもしれない²³⁾。

3. Web

Webページは配架の必要がなく、またデジタル化されているので機械による分類も分類の重複も可能である。具体的な手順として提案したいのは、サイト単位で申請してもらい、サイト内を全文検索し、多かった単語の属するカテゴリを候補としてあげる。それから制作者に確認し、最終決定する、というように機械を上手く使用するものである。既存のディレクトリとして代表的なものにYahoo! Japanがあるが、 - A - 2 で述べたように、カテゴリに無理があり、また「芸術と人文>人文」のように上位のカテゴリが無駄なのではと思うものもある。Yahoo! Japanの場合、エンターテインメント性が強いことを理解し、サイトが集中してしまったカテゴリへの対応を迅速に行う必要がある。さらに言うと、米国Yahoo!と全く同じものではなく、日本のサイトを集めているのだから、日本独自の構成にすべきである。

以上メディア別に望ましい分類法を考えてきたが、メディアによって分類法が変わる、特に排他的か重複可能かという違いがあることは混乱のもとになりうることも承知している。しかし、現在使用され

ている分類法が最適なものと考えることができない以上、より適した分類法を考えるとメディア別に違いが出ることも避けられないのである。

現実に分類法を変えるということは図書館のしくみを丸ごと変えることにも相当し、新しい分類法を作ったところで容易には普及はしない²⁴⁾。いかに現実を机上での理想像に近づけるかの工夫、方策を考えるのが今後の課題であろう。

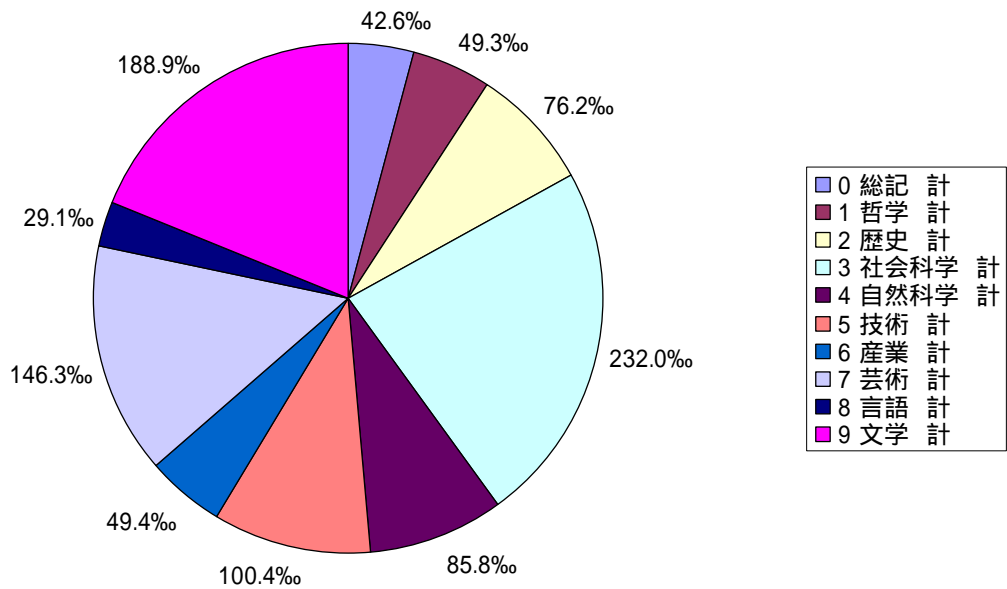
別紙 第1表 - 1 新刊書籍部門別点数 (2000年) (1)

| NDC | 部門 | 点数 | 類内 | | 全体 | |
|----------|--------------|---------------|----------------|------|---------------|------|
| | | | 占有率 | 偏差値 | 占有率 | 偏差値 |
| 000 | 総記 | 1,679 | 649.0% | 76.5 | 27.6% | 59.0 |
| 010 | 図書館・図書館学 | 135 | 52.2% | 47.1 | 2.2% | 45.9 |
| 020 | 図書・書誌学 | 198 | 76.5% | 48.3 | 3.3% | 46.5 |
| 030 | 百科事典 | 34 | 13.1% | 45.2 | 0.6% | 45.1 |
| 040 | 一般論文集・一般講演集 | 192 | 74.2% | 48.2 | 3.2% | 46.4 |
| 050 | 逐次刊行物 | 95 | 36.7% | 46.3 | 1.6% | 45.6 |
| 060 | 学会・団体・研究調査機関 | 26 | 10.1% | 45.0 | 0.4% | 45.0 |
| 070 | ジャーナリズム・新聞 | 134 | 51.8% | 47.1 | 2.2% | 45.9 |
| 080 | 叢書・全集・選集 | 94 | 36.3% | 46.3 | 1.5% | 45.6 |
| 090 | | | | | | |
| 0 | 総記計 | 2,587 | 1000.0% | | 42.6% | |
| 100 | 哲学総記 | 78 | 26.0% | 42.6 | 1.3% | 45.5 |
| 110 | 哲学各論 | 42 | 14.0% | 41.4 | 0.7% | 45.1 |
| 120 | 東洋思想 | 93 | 31.0% | 43.1 | 1.5% | 45.6 |
| 130 | 西洋思想 | 188 | 62.7% | 46.3 | 3.1% | 46.4 |
| 140 | 心理学 | 979 | 326.7% | 72.7 | 16.1% | 53.1 |
| 150 | 倫理学 | 564 | 188.2% | 58.8 | 9.3% | 49.6 |
| 160 | 宗教 | 200 | 66.7% | 46.7 | 3.3% | 46.5 |
| 170 | 神道 | 62 | 20.7% | 42.1 | 1.0% | 45.3 |
| 180 | 仏教 | 492 | 164.2% | 56.4 | 8.1% | 49.0 |
| 190 | キリスト教 | 299 | 99.8% | 50.0 | 4.9% | 47.3 |
| 1 | 哲学計 | 2,997 | 1000.0% | | 49.3% | |
| 200 | 歴史総記 | 151 | 32.6% | 45.3 | 2.5% | 46.1 |
| 210 | 日本史 | 1,035 | 223.3% | 58.6 | 17.0% | 53.6 |
| 220 | アジア史・東洋史 | 226 | 48.8% | 46.4 | 3.7% | 46.7 |
| 230 | ヨーロッパ史・西洋史 | 166 | 35.8% | 45.5 | 2.7% | 46.2 |
| 240 | アフリカ史 | 12 | 2.6% | 43.2 | 0.2% | 44.9 |
| 250 | 北アメリカ史 | 24 | 5.2% | 43.4 | 0.4% | 45.0 |
| 260 | 南アメリカ史 | 3 | 0.6% | 43.1 | 0.0% | 44.8 |
| 270 | オセアニア史 | 7 | 1.5% | 43.2 | 0.1% | 44.9 |
| 280 | 伝記 | 1,034 | 223.1% | 58.6 | 17.0% | 53.6 |
| 290 | 地理・地誌・紀行 | 1,976 | 426.4% | 72.7 | 32.5% | 61.6 |
| 2 | 歴史計 | 4,634 | 1000.0% | | 76.2% | |
| 300 | 社会科学総記 | 772 | 54.8% | 45.0 | 12.7% | 51.3 |
| 310 | 政治 | 1,412 | 100.1% | 50.0 | 23.2% | 56.8 |
| 320 | 法律 | 1,551 | 110.0% | 51.1 | 25.5% | 57.9 |
| 330 | 経済 | 3,875 | 274.8% | 69.5 | 63.8% | 77.7 |
| 340 | 財政 | 450 | 31.9% | 42.4 | 7.4% | 48.6 |
| 350 | 統計 | 63 | 4.5% | 39.4 | 1.0% | 45.3 |
| 360 | 社会 | 2,723 | 193.1% | 60.4 | 44.8% | 67.9 |
| 370 | 教育 | 2,526 | 179.2% | 58.8 | 41.6% | 66.2 |
| 380 | 風俗習慣・民俗学・民族学 | 531 | 37.7% | 43.1 | 8.7% | 49.3 |
| 390 | 国防・軍事 | 196 | 13.9% | 40.4 | 3.2% | 46.5 |
| 3 | 社会科学計 | 14,099 | 1000.0% | | 232.0% | |
| 400 | 自然科学総記 | 135 | 25.9% | 46.7 | 2.2% | 45.9 |
| 410 | 数学 | 274 | 52.5% | 47.9 | 4.5% | 47.1 |
| 420 | 物理学 | 152 | 29.1% | 46.8 | 2.5% | 46.1 |
| 430 | 科学 | 107 | 20.5% | 46.4 | 1.8% | 45.7 |
| 440 | 天文学・宇宙化学 | 85 | 16.3% | 46.2 | 1.4% | 45.5 |
| 450 | 地球科学・地学・地質学 | 146 | 28.0% | 46.8 | 2.4% | 46.0 |
| 460 | 生物科学・一般生物学 | 216 | 41.4% | 47.4 | 3.6% | 46.6 |
| 470 | 植物学 | 91 | 17.4% | 46.3 | 1.5% | 45.6 |
| 480 | 動物学 | 180 | 34.5% | 47.1 | 3.0% | 46.3 |
| 490 | 医学・薬学 | 3,832 | 734.4% | 78.4 | 63.0% | 77.3 |
| 4 | 自然科学計 | 5,218 | 1000.0% | | 85.8% | |

第1表-2 新刊書籍部門別点数(2000年) (2)

| NDC | 部門 | 点数 | 類内 | | 全体 | |
|----------|--------------|---------------|----------------|------|----------------|-------|
| | | | 占有率 | 偏差値 | 占有率 | 偏差値 |
| 510 | 建築工学・土木工学 | 721 | 118.1‰ | 52.1 | 11.9‰ | 50.9 |
| 520 | 建築学 | 664 | 108.8‰ | 51.0 | 10.9‰ | 50.4 |
| 530 | 機械工学・原子力工学 | 498 | 81.6‰ | 47.9 | 8.2‰ | 49.0 |
| 540 | 電気工学・電子工学 | 1,257 | 205.9‰ | 62.0 | 20.7‰ | 55.5 |
| 550 | 海洋工学・船舶工学 | 110 | 18.0‰ | 40.7 | 1.8‰ | 45.7 |
| 560 | 金属工学・鉱山工学・兵器 | 55 | 9.0‰ | 39.7 | 0.9‰ | 45.3 |
| 570 | 化学工業 | 155 | 25.4‰ | 41.5 | 2.6‰ | 46.1 |
| 580 | 製造工業 | 313 | 51.3‰ | 44.5 | 5.1‰ | 47.4 |
| 590 | 家政学・生活科学 | 1,749 | 286.5‰ | 71.2 | 28.8‰ | 59.6 |
| 5 | 技術計 | 6,105 | 1000.0‰ | | 100.4‰ | |
| 600 | 産業総記 | 168 | 56.0‰ | 46.0 | 2.8‰ | 46.2 |
| 610 | 農業 | 310 | 103.3‰ | 50.3 | 5.1‰ | 47.4 |
| 620 | 園芸・造園 | 291 | 97.0‰ | 49.7 | 4.8‰ | 47.3 |
| 630 | 蚕糸業 | 1 | 0.3‰ | 41.0 | 0.0‰ | 44.8 |
| 640 | 畜産業・獣医学 | 274 | 91.3‰ | 49.2 | 4.5‰ | 47.1 |
| 650 | 林業 | 69 | 23.0‰ | 43.0 | 1.1‰ | 45.4 |
| 660 | 水産業 | 87 | 29.0‰ | 43.6 | 1.4‰ | 45.5 |
| 670 | 商業 | 1,173 | 391.0‰ | 76.4 | 19.3‰ | 54.7 |
| 680 | 運輸・交通 | 408 | 136.0‰ | 53.3 | 6.7‰ | 48.3 |
| 690 | 通信事業 | 219 | 73.0‰ | 47.6 | 3.6‰ | 46.7 |
| 6 | 産業計 | 3,000 | 1000.0‰ | | 49.4‰ | |
| 700 | 芸術・美術 | 254 | 28.6‰ | 42.7 | 4.2‰ | 46.9 |
| 710 | 彫刻 | 40 | 4.5‰ | 40.3 | 0.7‰ | 45.1 |
| 720 | 絵画・書道 | 2,984 | 335.5‰ | 73.9 | 49.1‰ | 70.1 |
| 730 | 版画 | 30 | 3.4‰ | 40.2 | 0.5‰ | 45.0 |
| 740 | 写真・印刷 | 803 | 90.3‰ | 49.0 | 13.2‰ | 51.6 |
| 750 | 工芸 | 358 | 40.3‰ | 43.9 | 5.9‰ | 47.8 |
| 760 | 音楽・舞踊 | 1,445 | 162.5‰ | 56.3 | 23.8‰ | 57.0 |
| 770 | 演劇・映画 | 925 | 104.0‰ | 50.4 | 15.2‰ | 52.6 |
| 780 | スポーツ・体育 | 1,136 | 127.7‰ | 52.8 | 18.7‰ | 54.4 |
| 790 | 諸芸・娯楽 | 919 | 103.3‰ | 50.3 | 15.1‰ | 52.6 |
| 7 | 芸術計 | 8,894 | 1000.0‰ | | 146.3‰ | |
| 800 | 言語総記 | 173 | 98.0‰ | 49.9 | 2.8‰ | 46.3 |
| 810 | 日本語 | 495 | 280.3‰ | 63.1 | 8.1‰ | 49.0 |
| 820 | 中国語 | 172 | 97.4‰ | 49.8 | 2.8‰ | 46.3 |
| 830 | 英語 | 727 | 411.7‰ | 72.6 | 12.0‰ | 51.0 |
| 840 | ドイツ語 | 81 | 45.9‰ | 46.1 | 1.3‰ | 45.5 |
| 850 | フランス語 | 55 | 31.1‰ | 45.0 | 0.9‰ | 45.3 |
| 860 | スペイン語 | 26 | 14.7‰ | 43.8 | 0.4‰ | 45.0 |
| 870 | イタリア語 | 20 | 11.3‰ | 43.6 | 0.3‰ | 45.0 |
| 880 | ロシア語 | 7 | 4.0‰ | 43.0 | 0.1‰ | 44.9 |
| 890 | その他の諸言語 | 10 | 5.7‰ | 43.1 | 0.2‰ | 44.9 |
| 8 | 言語計 | 1,766 | 1000.0‰ | | 29.1‰ | |
| 900 | 文学 | 127 | 11.1‰ | 46.5 | 2.1‰ | 45.9 |
| 910 | 日本文学 | 9,333 | 812.7‰ | 78.1 | 153.5‰ | 123.9 |
| 920 | 中国・東洋文学 | 111 | 9.7‰ | 46.4 | 1.8‰ | 45.7 |
| 930 | 英米文学 | 1,571 | 136.8‰ | 51.5 | 25.8‰ | 58.1 |
| 940 | ドイツ文学 | 98 | 8.5‰ | 46.4 | 1.6‰ | 45.6 |
| 950 | フランス文学 | 147 | 12.8‰ | 46.6 | 2.4‰ | 46.0 |
| 960 | スペイン文学 | 28 | 2.4‰ | 46.2 | 0.5‰ | 45.0 |
| 970 | イタリア文学 | 18 | 1.6‰ | 46.1 | 0.3‰ | 44.9 |
| 980 | ロシア文学 | 32 | 2.8‰ | 46.2 | 0.5‰ | 45.1 |
| 990 | その他の諸文学 | 19 | 1.7‰ | 46.1 | 0.3‰ | 45.0 |
| 9 | 文学計 | 11,484 | 1000.0‰ | | 188.9‰ | |
| | 総計 | 60,784 | | | 1000.0‰ | |

第1図 新刊書籍部門別出版点数 対全体比（2000年）



第2表 偏差値70以上の項目（対全体）

| NDC | 部門 | 点数 | 類内 | | 全体 | |
|-----|-------|-------|--------|------|--------|-------|
| | | | 占有率 | 偏差値 | 占有率 | 偏差値 |
| 910 | 日本文学 | 9,333 | 812.7% | 78.1 | 153.5% | 123.9 |
| 330 | 経済 | 3,875 | 274.8% | 69.5 | 63.8% | 77.7 |
| 490 | 医学・薬学 | 3,832 | 734.4% | 78.4 | 63.0% | 77.3 |
| 720 | 絵画・書道 | 2,984 | 335.5% | 73.9 | 49.1% | 70.1 |
| | | | | | 329.4% | |

第3表 偏差値70以上の項目（類内）

| NDC | 部門 | 点数 | 類内 | | 全体 | |
|-----|----------|-------|--------|------|--------|-------|
| | | | 占有率 | 偏差値 | 占有率 | 偏差値 |
| 490 | 医学・薬学 | 3,832 | 734.4% | 78.4 | 63.0% | 77.3 |
| 910 | 日本文学 | 9,333 | 812.7% | 78.1 | 153.5% | 123.9 |
| 000 | 総記 | 1,679 | 649.0% | 76.5 | 27.6% | 59.0 |
| 670 | 商業 | 1,173 | 391.0% | 76.4 | 19.3% | 54.7 |
| 720 | 絵画・書道 | 2,984 | 335.5% | 73.9 | 49.1% | 70.1 |
| 140 | 心理学 | 979 | 326.7% | 72.7 | 16.1% | 53.1 |
| 290 | 地理・地誌・紀行 | 1,976 | 426.4% | 72.7 | 32.5% | 61.6 |
| 830 | 英語 | 727 | 411.7% | 72.6 | 12.0% | 51.0 |
| 590 | 家政学・生活科学 | 1,749 | 286.5% | 71.2 | 28.8% | 59.6 |

第4表 偏差値45未満の項目（対全体）

| NDC | 部門 | 点数 | 類内 | | 全体 | |
|-----|---------|----|-------|------|------|------|
| | | | 占有率 | 偏差値 | 占有率 | 偏差値 |
| 630 | 蚕糸業 | 1 | 0.3‰ | 41.0 | 0.0‰ | 44.8 |
| 260 | 南アメリカ史 | 3 | 0.6‰ | 43.1 | 0.0‰ | 44.8 |
| 270 | オセアニア史 | 7 | 1.5‰ | 43.2 | 0.1‰ | 44.9 |
| 880 | ロシア語 | 7 | 4.0‰ | 43.0 | 0.1‰ | 44.9 |
| 890 | その他の諸言語 | 10 | 5.7‰ | 43.1 | 0.2‰ | 44.9 |
| 240 | アフリカ史 | 12 | 2.6‰ | 43.2 | 0.2‰ | 44.9 |
| 970 | イタリア文学 | 18 | 1.6‰ | 46.1 | 0.3‰ | 44.9 |
| 990 | その他の諸文学 | 19 | 1.7‰ | 46.1 | 0.3‰ | 45.0 |
| 870 | イタリア語 | 20 | 11.3‰ | 43.6 | 0.3‰ | 45.0 |
| 250 | 北アメリカ史 | 24 | 5.2‰ | 43.4 | 0.4‰ | 45.0 |

第5表 Yahoo! Japan のカテゴリ数

| ジャンル | ページ数 | オリジナルカテゴリ数 |
|----------------|--------|------------|
| 芸術と人文 | 13408 | 25 |
| ビジネスと経済 | 72302 | 25 |
| コンピュータとインターネット | 7560 | 14 |
| 教育 | 4590 | 37 |
| エンターテインメント | 27983 | 20 |
| 政治 | 3387 | 17 |
| 健康と医学 | 6565 | 36 |
| メディアとニュース | 3812 | 21 |
| 趣味とスポーツ | 25230 | 14 |
| 各種資料と情報源 | 1699 | 18 |
| 地域情報 | 233376 | 5 |
| 自然科学と技術 | 10135 | 39 |
| 社会科学 | 4241 | 32 |
| 生活と文化 | 23391 | 31 |
| 合計 | 437679 | 334 |

第6表 出版物の販売部数^{※)}

| 年度 | 1996 | 1997 | 1998 | 1999 | 2000 | |
|--------|------|------|------|------|------|------|
| 書籍販売部数 | 915 | 876 | 813 | 792 | 774 | (万部) |
| 雑誌販売部数 | 3863 | 3814 | 3723 | 3537 | 3405 | (万部) |
| 合計 | 4778 | 4690 | 4536 | 4329 | 4179 | (万部) |

第7表 1日あたりの消費時間⁴⁾

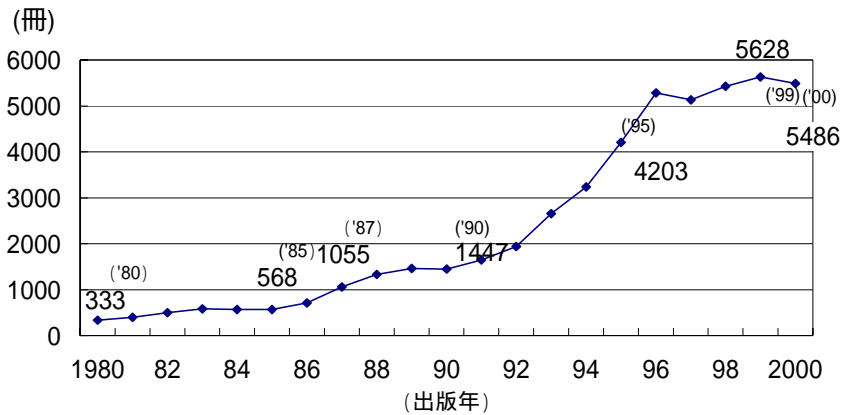
| | 平日 | | 土曜日 | | 日曜日 | |
|--------------|------|------|------|------|------|------|
| | 2000 | 1999 | 2000 | 1999 | 2000 | 1999 |
| 雑誌 | 0:06 | 0:04 | 0:10 | 0:09 | 0:09 | 0:06 |
| 本・単行本 | 0:06 | 0:07 | 0:10 | 0:09 | 0:10 | 0:10 |
| インターネット・Eメール | 0:08 | 0:03 | 0:10 | 0:04 | 0:10 | 0:04 |

(時間：分)

引用文献・注

- 1) 新村出編．広辞苑．第5版．岩波書店，1998．2988p．
- 2) 図書館情報学ハンドブック編集委員会編．図書館情報学ハンドブック．第2版．丸善，1999．1145p．
- 3) 日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会編．図書館ハンドブック．第5版．日本図書館協会．1990，619p．
- 4) 図書館情報学ハンドブック編集委員会編．図書館情報学ハンドブック．丸善，1988．1332p．
- 5) 及川正隆．「Yahoo! Japan」のカテゴリ構造とその分類．専門図書館，No.171，p.68-72（1998）
- 6) 緑川信之．本を分類する．勁草書房，1996．224p．
- 7) 固定配架方式（絶対配架方式）とは「書架に記号を割り当てて、その記号を請求記号として使うという方式」⁶⁾であり、「資料自体は主題に関係なく形体別受入順に書架に配列」⁴⁾され「各図書は書架の特定の場所に固定される」⁶⁾。記号は「当該図書が書架の中で何番目に位置するかを示す記号として扱われて」おり、「あくまでも書架上の位置を示す記号である」⁶⁾。注8)も参照。
- 8) 相対配架方式とは「請求記号として分類記号を利用する方式」⁶⁾。注7)も参照。
- 9) 岩猿敏生ほか編．新・図書館学ハンドブック．雄山閣，1984．430p．
- 10) 光富健一．デューイ十進分類法(DDC)．情報の科学と技術，Vol.39，No.11，p.478-p.483（1989）
- 11) もり・きよし原編，日本図書館協会分類編集委員会改訂．日本十進分類法．新訂9版．本表編．日本図書館協会，1995．
- 12) 小澤ゆかり．大学図書館として、どの分類表を使うか？ - DDC、NDCの比較検討を中心に．私立大学図書館協会会報，102，p.81-p.88（1994）
- 13) 新刊書籍部門別並びに判型別点数．出版年鑑．2001年度．第1巻．p.326-p.329．
- 14) 偏差値 $Y = 10 \times \frac{X - \mu}{\sigma} + 50$ （X：値、 μ ：平均、 σ ：標準偏差）
- 15) 国立国会図書館 Web-OPAC <<http://webopac2.ndl.go.jp/>>
726目のうち、726「漫画・挿絵・童画」が43点、726.1「漫画・劇画・風刺画」が54891点、726.101「漫画・劇画論・風刺画論」が495点、726.107「技法」が104点。726.5「挿絵・イラストレーション」が2189点である。
- 16) 1980～2000年の20年間で726.1の点数は約16倍にも増加。96年からは毎年5000点を越えている。（下図）

(図) 726.1「漫画.劇画.風刺画」の冊数の変遷 1980～2000
(NDL Web-OPAC)



- 17) 安形輝ほか．WWW ページの自動分類：NDC の分類体系と Yahoo のカテゴリを使った分類．情報処理学会研究報告．Vol.99，No.39 (DBS-118 FI-54)，p.113-p.120 (1999)
<<http://www.slis.keio.ac.jp/~ueda/uedawww2.pdf>>[2001-10-19]
- 18) 複合主題とは、例えば「日本の詩歌」という主題が詩歌という文学形式からの分類と日本語という言語からの分類が可能のような、「分類表の複数のファセットの複数フォーカスから構成される主題」²⁾のことをいう。注 19) も参照。
- 19) 混合主題とは、「<政治と宗教> や <化学のための数学> などのように、分類表の異なる 2 以上の主題分野に属するフォーカスからなる主題」²⁾のことをいう。注 18) も参照。
- 20) デジタルコンテンツ白書．デジタルコンテンツ協会，2001．p.79．
- 21) 情報メディア白書．2001 年版．電通，2001．p.231．
- 22) 長野由紀．新館紹介：国際基督教大学図書館新館 - ミルドレッド・トップ・オスマー図書館．大学図書館研究，No.60，p.63-p.70 (2001)
- 23) 木本晴夫．マルチメディア検索技術．情報の科学と技術，Vol.50，No.1，p.14-p.21 (2000)
画像からの色特微量、形特微量などの自動抽出、音楽からの音程差、感情価の自動付与、映像からのショットの検出等を実現されているが、「映像の構造化を論理的な意味解釈まで含めて全て自動的に行うのは困難」。
- 24) 「分類法を改訂するということは、それまでの版に基づいて付与した分類記号を変更しなければならなくなるということである。したがって、[DDC の：引用者]体系の大幅な変更を行わないという保証はそれを利用するものに安心感を与え」⁶⁾、DDC の普及を助けた。